

# 論文作成における「ナカテン」の使用について

藤田 浄秀, 筑丸 寛

横浜市立大学大学院医学研究科 顎顔面口腔機能制御学

## はじめに

著者らは学術論文や成書において名詞を並列する際には「ナカテン (・)」を好んで用いている。しかし、「ナカテン」の使用に関しては我々の間に必ずしも共通理解があるとは言えず、使用する者も使用しない者もあり、また、用い方も様々である。そこで、いくつかの資料に基づいて論文作成における「ナカテン (以下 中点)」の使用に関する考えを整理してみた。

## I 「中点」に関する資料

### 1 くぎり符号の使ひ方〔句読法〕案

昭和二十一年三月に文部省教科書局調査課国語調査室によって「くぎり符号の使ひ方〔句読法〕案」が発表されている。この案は、明治三十九年二月の文部省大臣官房調査課草案の句読法(案)を骨子とし、これを拡大して新たに昭和二十一年当時の現代口語文に適する大体の基準を定めたものである<sup>1)</sup>。

これによれば、くぎり符号は、文脈をあきらかにして文の読解を正しくかつ容易ならしめる事を目的としている。また、文の内容と文体とに応じて適当に用いる事とされている。

くぎり符号のうち、「中点」について記載してある部分は資料1のとおりである。「ナカテン」使用用例の第一番に「単語の並列の間にうつ。」と記載されており、用例が挙げられている。しかし、同時に、「ナカテンの代わりにテンをうつこともある。」と記載されている。

### 2 国語辞典による「中点」の説明

広辞苑<sup>2)</sup>ではなかてん【中点】は「中黒3に同じ。」となっており、なかぐる【中黒】の③では「小数点や並列点などとして用いる印刷用活字。なかてん。黒丸。『・』と説明されており、くろまる【黒丸・黒円】の②では「文字の傍または語の間などに用いる記号の一つ。なかぐる。『・』と説明されている(資料2)。

岩波国語辞典<sup>3)</sup>では「なかてん」「くろまる」は立項

(3) ナカテン	・
一、ナカテンは、単語の並列の間にうつ(例12)。 たゞし、右のナカテンの代りにテンをうつこともある(例3)。 三、テンとナカテンとを併用して、その対照的效果をねらふことがある(例4)。 四、主格の助詞「が」を省略した場合には、ナカテンでなくテンをうつ(例5)。 五、熟語的語句を成す場合にはナカテンをうたないのが普通である(例6)。 六、小数点に用ひる(例8)。 七、年月日の言ひ表はしに用ひる(例9)。 八、外来語のくぎりに用ひる(例11)。 九、外国人名のくぎりに用ひる(例12)。 〔附記〕外国人名の並列にはテンを用ひる(例13)。	(1) まつ・すぎ・ひのき・けやきなど。 (2) むら雲・おぼろ雲は、巻雲や薄雲・いわし雲などよりも低く、まつ・すぎ、ひのき、けやきなど。 (3) 明日、東京を立て、静岡、浜松、名古屋、大阪・京都・神戸、岡山、広島を六日の予定で見て来ます。 (4) 米、英・仏と協商【新聞の見出し】 (5) 英仏兩國 (6) 英独仏三國 (7) 一三・一五 (8) 昭和二一・三・一八 (9) 二・二六事件 (10) テーブル・スピーチ (11) アブラハム・リンカーン (12) ジョージ・ワシントン、アブラハム・リンカーン (13)

資料1 「ナカテン」の使用用例(文献1)

くろまる【黒丸・黒円】①黒色の円。②文字の傍または語の間などに用いる記号の一つ。すなわち「・」。なかぐる。

なかぐる【中黒】①矢羽の斑の一種。並列に使うもの。なかてん。東京・京都・大阪の「・」。②矢羽の切斑の一種で、上下が白く中央が黒いもの。「―」の矢。

なかてん【中点】中黒(③)に同じ。

資料2 広辞苑<sup>2)</sup>

なかてん【中点】①句切り符号の一種で、並列に使うもの。なかてん。東京・京都・大阪の「・」。②矢羽の切斑の一種で、上下が白く中央が黒いもの。「―」の矢。

資料3 岩波国語辞典<sup>3)</sup>

されておらず、なかぐる【中黒】①では「句切り符号の一種で、並列に使うもの。なか点。」と説明されている(資料3)。

大辞林<sup>4)</sup>では「なかくてん」は立項されておらず、なかぐる【中黒】①では「黒丸の活字『・』のこと。単語を並列にするときの区切りなどに用いる。中ボツ。中点。黒丸。」と説明されており、くろ まる【黒丸・黒円】②では「文字のわきにつけるくろいまるのしるし。また、語と語の間などにつける丸い点『・』。なかくろ。」と説明されている(資料4)。「中ボツ」は立項されていない。

三省堂国語辞典<sup>5)</sup>ではなかくてん【中点】は「なかくろ」となっており、なかくろ【中黒】では「くぎり符号の一つ。小数点や並列を表すために、行のまんなかにつける点。なかくてん。ぼつ。『・』」と説明されている。ぼつは「①点。②中黒点。『・』」と説明されている(資料5)。

### 3 「中点」の使用例

「中点」はいずれの分野の文章においても広く使用されているので身近に使用例を見出すことは容易である

なかくろ回【中黒】①黒丸の活字「・」のこと。単語を並列するときの区切りなどに用いる。中ボツ。中点。黒丸。②切抜符で、上が白く、中央が黒いもの。その黒い部分の大きいのを大中黒、小さいのを小中黒という。ま

資料4 大辞林<sup>4)</sup>

なかくろ【中黒】①黒丸の活字「・」のこと。単語を並列するときの区切りなどに用いる。中ボツ。中点。黒丸。②切抜符で、上が白く、中央が黒いもの。その黒い部分の大きいのを大中黒、小さいのを小中黒という。ま

資料5 三省堂国語辞典<sup>5)</sup>

はつけつびょう【白血病】白血球の腫瘍性増生を来す疾患。急性・慢性、また骨髄性・単球性・リンパ性などの別がある。貧血・肝腫大・脾腫を伴い、発熱・出血傾向、感染抵抗力の低下等を来し、予後は一般に不良。けつきゅう【血球】(blood-corpuscle)血液の細胞成分。血漿中に浮遊する。赤血球・白血球および血小板がある。白血球には顆粒球・単球・リンパ球の別があり、組織内に遊出する。

資料6 広辞苑<sup>2)</sup>

のう【\*用脳】[脳]ノウ(ナウ) ①【造・名】頭蓋骨(ぶどう)の中にある灰白色の物質。意識・神経活動の中枢。脳髓。のうみそ。「脳をわずらう」「脳漿(のうじょう)・脳膜・脳神経・脳病・脳震盪(のうどう)・脳溢血(のうじつ)・脳充血(のうじゅう)・脳出血・脳貧血・大脳・小脳・間脳」②【造・名】精神のはたらき。記憶力・判断力等。「脳が弱い」「頭脳・脳裏・洗脳」③肝心のもの。主要な人物。「首脳・脳髓」④草木のしん。

資料7 岩波国語辞典<sup>6)</sup>

が、縦書き国語辞典の広辞苑<sup>2)</sup>(資料6)、横書き国語辞典の岩波国語辞典<sup>6)</sup>(資料7)、古典文学作品から徒然草二十四段<sup>7)</sup>(資料8)の具体例を示す。いずれも名詞の並列には「中点」が用いられている。

## II 考察とまとめ

中点は、文章補助記号の一つとして「くぎり符合の使用方〔句読法〕案」<sup>1)</sup>で正式に認められているものであり、広く用いられている(資料6~8)。

論文作成、すなわち、文章の作成に際して句読点(丸と点)のみならず、「ナカテン」「ナカセン」「テンテン」「マルカッコ」「カギカッコ」「二重カギカッコ」「ハイフン」「点線」「傍点」「疑問符」「感嘆符」などが用いられ、さらに横書きでは、「ピリオド」「コンマ」「コロソ」「セミコロン」「( ( ) )」「( )」「“ ”」などの引用符などが用いられる<sup>1)</sup>。多くの文章補助記号、すなわち、くぎり符号を用いる理由は、偏に文脈をあきらかにして文の読解を正しくかつ容易ならしめようとする事にある<sup>1)</sup>。

欧米の言語と異なり、日本語はくぎり符号のある部位

第二十四段  
齋宮の、野宮におはしますありさまこそ、やさしく、面白き事の限りとは覚えし  
か。「経」「仏」など忌みて、「なかく」。「染紙」など言ふなるもをかし。  
すべて、神の社こそ、捨て難く、なまめかしきものなれや。もの古りたる森のけ  
しきもたゞならぬに、玉垣しわたして、榊に木綿懸けたるなど、いみじからぬかは。  
殊にをかしきは、伊勢・賀茂・春日・平野・住吉・三輪・貴布禰・吉田・大原野・  
松尾・梅宮。

資料8 徒然草<sup>7)</sup>

以外では単語が連続して並ぶことから、くぎり符号の役割はより一層重要である。

その際、文節の区切りの符号と名詞の並列の間に打つ符号との両者に同じ「点」を用いるよりも、文節の区切りには「読点（、）」、名詞の並列の間には「中点（・）」と、異なる符号を使い分けたほうが両者の差異は明確となり、複雑な内容の文章でもその文脈を明らかにして文の読解を正しくかつ容易ならしめる効果がある。すなわち、「読点」の他に「中点」を用いる事には合理性がある。

それでは、日本語と同様にくぎり符号のある所以外は単語が連続して記載される中国語ではどうなっているであろうか。

資料9は、旅行会社の営業マンが桂林に旅行を計画している顧客に地図を示しながら桂林について説明している場面を想定した中国語の会話である。その大意は、「御覧なさい、桂林には多くの観光スポットがあります、たとえば独秀峰・象鼻山・七星岩・芦笛岩等々です。」である。

营业员 你看，桂林有很多观光点，像独秀峰、象鼻山、七星岩、芦笛岩等等。

資料9 中国語における「顿号（＝中点）」使用例（文献8）

中国語では文節の区切りには「逗号（，）」、文の終わりには「句号（。）」が用いられるが、名詞の並列には「顿号（、）」が用いられている<sup>7)</sup>（資料10）。すなわち、文節の区切りと名詞の並列とではくぎり符号を変えており、丁度日本語における「読点」と「中点」の使い分けに一致している。日本語と中国語とで、分かりやすい文章を書くための工夫の一つとして、文節の区切りと名詞の並列とでは異なったくぎり符号を用いたほうがよいとする点では考え方を同じくしていると思われる。

#### 句読点の種類

- ‘。’ jùhào (句号) …… 文 (sentence) 末の休止。
- ‘，’ dòuhào (逗号) …… 文中の休止。
- ‘、’ dùnhào (顿号) …… 文中の並列語句の間の休止。

資料10 中国語における句読点（文献8）

ただし、「〔句読法〕案」には強制力はなく、「文の論理的なすじみちを乱さない範囲内で自由に加減し」てよい<sup>1)</sup>とされている（資料1）。従って、使用しない自由はある。しかし、「ナカテン」を含む「くぎり符号の使ひ方」は、国語審議会「国語の教育の振興について」の趣旨に基づいて文化庁が編集した『「ことば」シリーズ』にも収録されている事項である。従って、いずれの分野の文章においても適宜「中点」を使用することは許

されるのではないかと考えられる。

また、「中点」は「中黒」「中黒点」とも「黒丸・黒円」あるいは「中ポツ」「ポツ」とも呼ばれる（資料2～5）。

なお、くぎり符号の使ひ方〔句読法〕案<sup>1)</sup>では、「疑問符」「感嘆符」「引用符」などを除いてくぎり符号のほとんどが片仮名で記載されているので本小文の表題には「ナカテン」を用いたが、国語辞典ではむしろ漢字や平仮名で記載されていた（資料2～5）。

また、国語辞典によれば「なかくてん」が立項されていないもの<sup>3)4)</sup>もあり、また、「なかくてん（中点）」の立項の下で説明されるよりも「なかくろ（中黒）」の立項の下で説明されているので、「中点」よりも「中黒」の呼称を使用した方がよいと思われる。更に「くろまる（黒丸・黒円）」では「文字のわきに打つ点、すなわち傍点」の意味をも含んでいる（資料2～5）。従って「中点・中黒・中ポツ・ぼつ」と「黒丸・黒円」とは必ずしも同義ではないと思われた。

なお、「中点」と関連して最後に日本語の句読点について述べる。縦書きではマル（。）とテン（、）を用いるが、横書きでは①マル（。）とテン（、）、②マル（。）とコンマ（，）、③ピリオド（.）とコンマ（，）の三通りがある。①は縦書きの日本語と同様の句読点であり、③は英語（欧文）と同様の句読点である。本誌は③に依っている。②は「公用文作成の要領」<sup>9)</sup>に即したものであり、横書きの算数・理科などの教科書や役所文書の多くはこれを採用している。この「公用文作成の要領」<sup>9)</sup>の「第3 書き方」の注2.に「句読点は、横書きでは『，』および『。』を用いる。事物を列挙するときは『・』（なかくてん）を用いることができる。」と書かれている。すなわち公用文においても「中点」の使用が勧められている。

#### おわりに

「ナカテン（中点）」は、文章のくぎり符号の一つとして「くぎり符号の使ひ方〔句読法〕案」<sup>1)</sup>で認められており、文の読解を正しくかつ容易にする一助として名詞の並列の際に「ナカテン（中点）」を打つことが勧められている。しかし、強要されるものではない。また、「公用文作成の要領」<sup>9)</sup>でも「中点」の使用が勧められている。

なお、「中点」は国語辞典によっては立項されておらず<sup>3)4)</sup>、「中黒」の項の下にくぎり符号である「・」の説明が記載されているものが多いので、現在ではくぎり符号である「・」は「中黒（なかくろ）」と呼称する事が適切と思われる。

文 献

- 1) 文化庁 編集：「ことば」シリーズ 25 言葉に関する問答集12. くぎり符号の使ひ方〔句読法〕案, 71-82, 大蔵省印刷局, 1986.
- 2) 新村 出 編：広辞苑 第五版. 岩波書店, 1998.
- 3) 西尾 実, 岩淵悦太郎, 水谷静夫 編：国語辞典 第四版. 岩波書店, 1986.
- 4) 松村 明 編：大辞林. 三省堂, 1988.
- 5) 見坊豪紀, 金田一京助, 金田一春彦, 柴田 武, 飛田良文 編：国語辞典 第四版. 三省堂, 1992.
- 6) 西尾 実, 岩淵悦太郎, 水谷静夫 編：国語辞典 第六版〔横組版〕. 岩波書店, 2000.
- 7) 西尾 実, 安良岡康作 校注：徒然草 岩波文庫, 第70刷改訂. 岩波書店, 1985.
- 8) 傳田 章 著：中国語 I. 34, 85, 放送大学教育振興会, 2001.
- 9) 国語研究会 監修：〔第6次改訂〕現行の国語表記の基準. 公用文作成の要領について（公用文改善の趣旨徹底について）. ぎょうせい, 378, 2001.